



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市化にともなう Rurality の変性 ( I ) : その理論的根拠と方法論的枠組
Author(s)	金田, 弘夫; KANETA, Hiroo
Citation	北海道大学農経論叢, 26, 57-77
Issue Date	1970-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10862">https://hdl.handle.net/2115/10862</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	26_p57-77.pdf



# 都市化にともなう Rurality の変性 (I)

—— その理論的根拠と方法論的枠組 ——

金 田 弘 夫

## 目 次

I 序 ——問題の提起と限定——	57
II 農村社会体系の構成とその特性	60
III 特性分析の方法論的枠組	68
1 その理論的根拠	70
2 その限界と条件	74
IV 実証分析——広島町の Rurality の変性	以下次号
V 結 論	

## I 序——問題の提起と限定——

都市化の伸展や産業化の衝撃にともない、最近我国の農村社会がその根底から激しく動揺しつつあることについては、ここに詳述するまでもなく明らかなところである。その不断の深化にともなう衝撃の累積によって、既存の農村社会体系がその構造・機能の両側面において様々なる変容を誘発し、従来みられた農村社会の独自の特色やその社会的統一性が著るしく失なわれつつあることは事実である。このことは、最近一つの風潮となってきた都市と農村とは一元化するのではないかという所謂都鄙一元論的見方の中にも極めて端的に現われている。<sup>1)</sup>

また、最近における農家の生活様式や農民意識の著るしい変容、資本主義の農村の浸透にともなう所得追求型社会への転化や企業的農家の現出、農民層

---

1) 君塚正義「農村の生活環境—それを担う主体」『生活研究の領域と研究手法について』農林省農業技術研究所 昭和42年3月、2頁。

の分解、伝統的家族制度の崩壊或いは部落の解体といった一連の現象をみる  
とき、これ等の経験的事実が、いづれも都市化や産業化の衝撃による農村社会  
体系の激しい変動の諸相を物語るものであることは明らかであって、いまや  
これらの変動の過程やその趨勢を抜きにして農村社会を論ずることは到底出  
来ない。

本稿においてとりあげた問題は、上述の如き都市化や産業化との関連にお  
いて、これ等のものが、農村社会体系の変動要因として作用する場合、果し  
て農村社会の「何が変わるか」という問題を前提としながら、「変わるものは  
農村社会体系の基本的な構成部分 (compartments) にみられる本質的な社会  
的特性である」という仮説に立脚し、この「特性」を中心にして実証的な分  
析を試みようとするものである。したがって、ここでは農村における変動の  
考察に必要とされる事実的検討を、その特性変動の分析を通じて展開しよう  
とするものであって、農村における変動要因の一つとして都市化や産業化そ  
のものの過程を直接考察の対象とするものではない。

ところで、問題をかくの如く限定すると、差当り従来農村社会の特性概念  
の一つとされてきた *Rurality* の概念を基準とし、これを根拠として、農村の  
特性を分析しなければならなくなるのは当然である。しかしながら、農村の  
社会的特性は、たとえ *Rurality* においてもっともよく代表され集約されてい  
るとしても、決してこれに尽きるものではない。この外にも社会体系の構造  
や機能に密着した様々なる特性がみられる。ここで必要とされることは、そ  
もそも、農村社会体系とは何か、その実体的枠組を明らかにし、それとの関  
連において、*Rurality* 以外にどのような特性概念が設定されるか、まず、こ  
の点を明らかにし、これによって変動分析の戦略的前提を構築することであ  
る。本稿においては、この点を第一の課題とする。

次に、取扱わねばならない事は、都市化や産業化にともなう農村の一連の  
個性の変化を如何なる方法・戦略・手段によって把えるか、この点を明らか  
にすることである。

これには基準となる特性の範疇をどう把えるか、また、これに応じてその  
把握の方法をどう変えてゆくかという新しい問題がともなう。たとえば、  
*physical* な特性と *meta-physical* な特性あるいは *biological* な特性とでは特  
性の範疇が異なるわけで、これを一つの方法で把えることは出来ない。また

どの程度特性に変動があったか(特性変動)、変動そのものにどのような特色(変動特性)があったか、また変動の方向性(変動指向)等をしめす変動をめぐる独自の単位と概念をどう設定するかが問題として提起される。

これら一連の問題については、従来ほとんど考察が行なわれていない。ここではこの問題をさらに二つに分け、①一次的な特性の変化を把える戦略的に有効な手段として、“連帯性”の分析を誘導することにして、その意義を明らかにし、②の特性変動の単位化や変動特性の方向性については、後に実証分析の段階において明らかにすることにし、これを本稿における第二の課題とする。

次に、この第二の課題との関連において、かかる方法によって実証分析を展開したとき、その結果に、どのような社会学的意味があるかこの点について考察することが必要となってくる。これは実証分析の結果を一般化する操作にもつながるが、これによって、前述した最近における一つの風潮としての都鄙一元化論に対しても、何らかの情報と資料を提供することになると思われる。

また都市化や産業化による農村の様々なる変容過程がどのような場合にどこまで農村を浸蝕してゆくか、あるいは農村はその外生的与件の変動や外生因子の作用に対応して、その特性(rurality)をどのように守りあるいは変えてゆくか、その耐性や変性の構造が如何なるものであるかを一般化しなければならぬ。これら一連の問題は社会過程ともかかわる問題であって、この点を本稿における第三の課題としなければならない。

なお、実証分析段階において必要とされる配慮に、対象農村の選定の問題がある。この点については、ここでは最近都市化と産業化の影響をもっとも激しく受けたといわれている札幌郡広島町の農村部を素材に求め、その調査を本年(1969年)夏に実施した。調査は北大農学部農村社会学専攻ゼミのメンバーによって行なわれたが、この学術調査に役場及び農家が全面的に協力してくれたお蔭でわれわれは現実の農村から極めて多くのものを学びとることが出来た。ここで取扱った広島町関係の調査資料はその極く一部であるが、われわれは本稿とは別に学術的な立場から調査結果を全面的に分析することによって広島町の社会的性格を明らかにし、その将来の発展に資するよう心がけている。そして、本稿における分析も、いってみれば都市化によって稀

薄になった広島農村の Rurality の行くえを追跡し、これを解析するようなものであるが、いづれにせよ、このような努力の傾注によって現地の農民各位の期待にこたえてゆくことが、本稿における研究の副次的な課題としてとくに強調されなければならない点であると思われる。

これを要するに、本稿では、社会変動にともなう農村社会の形質の変動を実証的に把握することを目的としている。しかし、これをかかると小稿の形でもこまで処理出来るかはなはだ疑問である。また紙幅の都合で、本稿をⅠⅡに分け、Ⅰにおいては理論的な問題を、Ⅱにおいては実証分析の問題を分けて論ずる形になった。いづれにせよ、不足のところは今後の批判と教示をま<sup>2)</sup>って大いに発展させたい。

## Ⅱ 農村社会体系の構成とその特性

### — Three Compartments Theory —

社会変動の一般理論において、故小松堅太郎教授や富田富士雄教授が社会変動の問題は、結局①社会の何が変動するか、②変動の過程・様式はどうか、③変動を起す力(要因)は何か、という三つの問題に集約されることを指摘されたことは、この研究においても示唆に富むところが少くなくない。先にも触れた如く、都市化や産業化の衝撃によって農村が変動するという場合、上記の社会変動の命題にみられる如く、農村社会の「何が変動するのか」、この点について明確な規定が施されなくては、それは社会変動論としての要件に欠けるといわねばならない。

この点、農村の社会変動については、その過程を論じたものは比較的が多いが、何が変わるか、この点に焦点を絞った考察は意外に少<sup>4)</sup>ない。ここでは所与の社会体系の形質そのものの変ることをもって社会変動とし、社会変動とそれ以外の単なる現象的な変化とまず区別する必要があると思わ

2) 札幌郡広島町における Rurality の変性についての実証分析は、紙幅の都合で次号に掲載する予定。

3) 小松堅太郎著「社会変動論」昭和28年1頁以下、富田富士雄著「社会変動」講座社会学第八巻 1958年版81頁。

4) 例えば R.M. Williams, Jr. "Our Changing Rural Society". 1962, P.4, E.A. Wilkening, "Some Perspectives on Change in Rural Societies", Rural Sociology, 1964, March Vol. 29, この論文ではむしろ、農村社会に変動をもたらすプロセスが問題とされており、変わるものは“社会体系”であるとしているだけである。

れる。勿論、一見社会の単なる表面的な変容・推移と思われるものであっても、それが農村社会に固有な社会体系の深層にまで喰い込み、その状態・構造・機能等の特色を変えてしまうようなものがあれば、それは単なる変化ではなく、社会変動の範疇に属する。したがって、はじめに所与の社会体系のもつ状态的・構造的・機能的な特色とは一体何か。この点が明らかにしなくては、社会変動について十分な考察が出来ない。

農村の場合、農村社会体系のもつ最も一般的にして包括的な特色は、従来の社会学的概念によれば、Rurality である。Rurality は社会のもつ農村的な特色であり、Rural と農村的なことはしばしば同意語として取扱われている。この Rurality という概念には、さらにそれを特長づける様々な属性がみられるが、これを都市社会との対比において最も明確に規定したのが P.Sorokin の 8 つの標識による都鄙社会の合成概念であり、また L. Nelson, L. T. Smith 等の複合的規定である<sup>5)</sup>。

その詳細については、ここでは触れないが、この農村の特性概念としての Rurality は、実は伝来的な農村社会の形態・構造・機能上の諸特徴を包括した表現型 (phenotype) であり、集団としての農村社会の独自の形質 (merkmal) の特徴的な発現形態に外ならない。例えば、P. Sorokin が“人口密度と Rurality との間には反比例の関係がある”<sup>6)</sup>と述べていることは、農村社会の形態上の特色と、爾後の特色との関連を一般的に表現したものであって、Rurality が、農村社会の構成的要素の一つであるその形態上の属性によって与えられた形質の概念であることは明らかである。さらに生態学的な状態以外の構造・機能の点においても、それぞれそれに対応した特色が、都市社会との対比において把握されるのであって、このような比較社会学的手法によって得られた農村社会の諸特色を包括的に表現したのが P.Sorokin 等のいわゆる Rurality

- 5) P.Sorokin の複合概念は① Occupation ② Enviroment ③ Size of Community ④ Density of Population ⑤ Heterogenity and Homogeneity ⑥ Social Differentiation and Stratification ⑦ Mobility ⑧ System of Interaction である。

L.Nelson は、Occupation と Population Density の二つに大別し、さらに 14 の要素について、農村を市街地と都市との比較において、その特性を規定している。L.Nelson, “Rural Sociology”, 1948, P.24.

L.T.Smith は、P.Sorokin の 8 つの要素による規定と極めて類似しているが、これに加えて、“Social Solidarity” を入れているところに特色があり、この点は本稿における問題の展開に密接な関連がある。L.T.Smith “The Sociology of Rural Life”, 1946. PP.16-38.

の概念である。

ところで、農村社会において変動するものが、この Rurality であろうという発想は、アメリカでも一つの風潮になっている。すなわち F. K. Willits, R. C. Bealer 等は、Rurality を個人または地域の特性を示めず概念として、これを(1)生態学的側面、(2)職業的側面、(3)社会文化的側面の三つの局相 (aspects, facets, complex) に整理し、さらにこれら三つの側面における要素が相互に作用して Rurality を形成するという函数的な関係が、果して今日でも存在するかどうかを実証的に分析している。その相関分析の結果として、F. K. Willits 等は、今日のように進んだアメリカ農村部では、この種の Rurality の概念構成がもつ power は低く、breadth には一貫性がなく、また解釈上の有意性にも乏しいことが明らかであるとしている。換言すれば、人口密度の稀薄なこと、コミニュテーのサイズの小さいこと、生活様式の等質性、都市からの分離等々によって規定される Rurality の概念は極めて曖昧で、包括的であり、何がどれにどのように関連して Rurality という特性が形成されるのか極めて不明確であって、これでは実証分析の用具として役に立たないというのである。

このことは、明らかにアメリカの農村が既に激しく変容し、かつての 50 年前の特性概念では説明出来ず、また実体に合わなくなったことを意味していると思われるが、このような傾向は、部分的に最近の北海道の農村においてもみられるところである。<sup>7)</sup>しかし、いづれにせよ F. K. Willits 等が、より調査を拡大することによって新しい Rurality の合成概念を設定しなければならぬと主張していることは十分首肯出来る。ただ、私はその前に歴史的な存在としての農村を前提におき、その実体に即した社会体系の枠組を設定し、その中で、Rurality が如何なる位置におかれるかを明らかにする必要があると思われる。

このような体系的枠組を設定しようとする場合、従来の類型論的な立場か

6) F. K. Willits, R. C. Bealer, Rural Sociology, Vol. 32, No. 2, 1967, pp. 165~177.

7) この点について、P. Sorokin が立てた“人口密度と Rurality との間には反比例の関係がある”、“Community と Size、農業人口率の間には反比例の関係がある”という命題は、北海道の場合、なお定立可能であるが、15年以前にくらべれば、その原型との一致性は可成りくずれ、部分的に合わなくなっている。この事実については、昭和 44 年 10 月第 42 回日本社会学会において報告した。

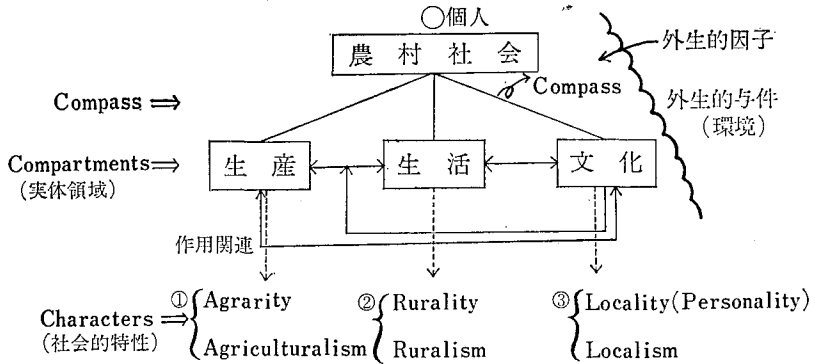
らする農村社会の概念規定は殆んど役に立たない。実体を北海道の農村にとる場合は、極めて明白であって、例えば、北海道には生粋の村落共同体のようなものは一般化していない。そこにあったものは大方裸一貫の入植者や移民の群生であり、また一部の団体入植をのぞけば、大部分は異質者の混成による小農業社会である。この社会の形成が明治以降の日本資本主義の発展とその施策としての北海道拓殖政策と不可分に関連していることは重要な事実である。したがって、北海道の農村社会は、「社会的行動主体」としての農民、「経済的行動主体」としての農業者、「内地的文化の運搬者」としての移民という三重の性格をもった主体によって構成された社会であり、さらにこれら農業者としての主体に対して、より上位の立場から施策を施す政府や道庁の存在を抜きにすることは出来ない。政府はしたがって農村社会の外側にある「政策主体」であるが、これが同様に農村社会の外側にある地主や商業資本、有力者と一定の結びつきをもち、かつての大農場に象徴されるようないま一つの外的な「所有主体」＝大地主によって構成されていたことは明らかである。ただ農地改革によって、この大土地所有の主客が、その社会的意義を失ったことは事実である。

いまもし、このような社会構成の主体とその歴史的性格を視点において、今日の農村に Compass をひくと、行為の実体領域として、主体の特性に合った三つの Compartments が立体的にあらわれる。すなわち、「生産」と「生活」と「文化」がそれであって、これ等の Compartments は社会体系の構成要素として、また行為の実体領域として最小限度において必要とされるものである。ここでこの行為の機能的実体領域を“Compartments”と表現したのは、この語が日本の家屋におけるフスマや障子で仕切られた部屋の如き区分を意味するからであって、仕切りをはずせばいつでも一軒の家になるという性質を語意の中からくみとることが出来るからである。従って、この三つの Compartments の仕切りは仮りのもので、それをはずせば直ちに一個の Society あるいは一つの Community になることはいうまでもない。いまこれを図式化すれば第1図の如くである。

ところで、これら三つの部門を構成する諸要素は、また社会体系の内生変数として相互に作用するものであり、その相互作用の定式化によって、社会内部の構造と機能が確定する。とりわけ、農村の場合は、土地に結びついた

第 1 図

農村社会の体系構成とその特性



生産力と生産様式が、爾後の領域における特性を強く規定する関係が強いの  
 で、したがって、この「生産」の Compartment における生産力と生産様式の  
 あり方あるいはその特性如何は、Rurality を規定する一つの 内生的因子として  
 重視しなければならない。ここでは、行為の主体のもつこの「生産」の領域に  
 における特性を、とくに“Agrararity”という語で表現する。Agrararity とは例え  
 ば焼畑農業体系、自給自足の小農生産体系、独立自営の農業生産体系、集团的  
 組織的共同的大規模農業体系、装置化システム化農業体系等々の様々なる生  
 産様式、あるいは経営形態によって表現される経済行動の特性である。換言す  
 れば、それは、所与の農村社会における「生産」の領域における経済的行為の  
 特性を主体的に規定するものであって、このような農業生産体系の社会的特  
 性がすなわち Agrararity である。また、その担手としての個人や地域が主体  
 的に所与の Agrararity を極限化し、さらにそれが主体的な姿勢として内面的  
 に意識されると、そこに、Agriculturalism があらわれる。この ism は自己の  
 営農についての職業的意識の如きものであって、農本主義とはことなる。  
 「生産」の領域においてあらわれる所与の Agrararity がこの部門における個人  
 の行動を通じて、「生活」、「文化」等の社会体系の他の領域における特性と機  
 能的に関連することは前述の通りである。しかし、それは一方的なものでは  
 ない。例えば同じ小農生産の範疇に属するものであっても、自給自足的小農  
 生産の場合と独立自営の小農生産の場合とでは、Agrararity や Agriculturalism  
 の内容や性格が異なる。このことは Agrararity が、逆にまた「生活」や「文化」の  
 領域における諸要素との機能的な相互関連によって規定されるからである。

## 都市化にともなう Rurality の変性 (I)

次に、農村社会体系の第二の部門である「生活」の領域についてであるが、この領域は農民生活の場であり、その行為の生活機能体系にほかならない。ここでも、これを個人的レベルと地域的レベルの二つの水準から分析することが出来るが、その特性は概念的には結局狭義の Rurality や Ruralism に集約される。Rurality には、(1)衣食住の如き現象的な生活機能あるいは消費面にあらわれる agrestic な特性をはじめ、(2)家族生活の現象面にあらわれる構造的機能的な特性、(3)社会関係、人間関係等の面にあらわれる agrestic な特性、(4) demo-ecological な面における生態的特性、(5)農民の体質や健康状態の如き肉体的な特性等が含まれる。

これ等の一連の特性は、換言すれば農民あるいは農村における居住性、集団性、相互依存性、階層性、再生産性、消費性、保健性等々の社会的属性に加えて demo-ecological な属性の所産でもあって、P.Sorokin があげた 8 つの農村社会の複合的な特性の多くは、この Compartment における特性と一致する。したがって、従来いわれてきた Rurality の多くは、ここではこの「生活」の Compartment における属性とみられる。

この狭義の Rurality や Ruralism は後にも論ずる如く、生産や文化の如き要素をはじめ、他の強力な外生的因子の作用に対して、可成り微妙な適応性と弾力性を示すものであり、この点どちらかといえば、自立的因子としての力に乏しい。したがって、この特性は都市化、近代化、産業化、情報化等々の外生的因子による衝動に遭遇すると、比較的にすみやかにそれに対応して、その形質を変えてしまう可能性が見られる。かかる事情から Rurality は社会変動の過程においては、しばしば「残渣概念」すなわち、なおどれだけ Rurality が残っているかという概念として作用する余地が残る。もっとも、この場合でも、はじめからその形質を変えて Rurality が変性する場合と、本来の Rurality が次第に失なわれても、なお何らかのものが残存する場合とは区別しなければならないし、また一部が変性し、<sup>8)</sup> 他が残存するという場合(偏在変性)もあり得る。

最後に、「文化」の実体領域であるが、ここではその特性をあらわす概念とし

---

8) なお、Rurality の概念については、拙稿「農村社会の開発とその理解のために」—— Rurality 概念の設定とその有用性について —— 『開発』 1969 年第 24 号、22—28 頁参照。

て Locality と Localism があげられる。ここでいう文化とは広義の文化であって、物質文化や項目文化のみならず、これを超え人間行動の根源に遡ってこれをリードするある窮極的なものの考へ方や価値観、関心等が含まれる。文化をこのように規定する時、その内容にとくに顕著な地方的な色彩や地方的な特殊性がみられるとき、その特色を Locality と称するのであるが、この特色は個人の水準では、これを Personality の中からくみとることも出来る。

より具体的にいえば、Locality は地方的な物質文化、精神文化をはじめ、いわゆる地方色 (local color) という日常語で表現される様々なる価値観、関心、人生観、郷土愛、諸文化的遺産、制度慣習、技術体系、自治観、政治観、嗜好性、生活様式等々、いわゆる上部構造のもつ地方的な特色にほかならない。さらにまた、地方のもつ下部構造としての物質的構造が人間行動に様々なる形をとって反映する場合、このような作用関連様式それ自体がもつ地方的な個性がすなわち Locality であるともいえる。それ故に、たとえ地理的、自然的条件の同質性があっても、それだけで Locality が形成されるものではない。これ等の物質的、自然的条件に対する人間としての対応の姿勢・様式、あるいはこれを变化させる人間の作為的行動の様式がすなわち、文化であり、その構造的・機能的な特色に一定の空間範囲における同一性が何らかの形で発現している時に、そこに Locality があるということになる。

これに対して、Localism は、このような文化の特殊性が主体者に自覚されそれが行動の基準として主体的に価値づけられ、かつ極限化されたものをいうのである。それは Regionalism と異なる。Regionalism は Localism の政治的な面における一つの発現形態にほかならない。さらにまた、Agrarianism と異なる。これは社会経済的面における意識の地方的な発現形態であり、かなり地方色を帯びた一つの政治的な行動理念であるが、Localism の一表現形態にすぎない。

以上の如く、農村社会体系を実体的にみれば、そこには、生産・生活・文化という三つのコンパートメントよりなる独自の行為領域が構造的に求められ、さらにそれぞれの領域に対応した社会的特性を示す三つの概念が設定される。

ところで、上述したような構造をもつ農村社会の体系は、実はそれぞれの領域の内側にある多様な内生因子の相互作用によって形成・維持される。ま

た、その外側には、なおこれに作用する外生的因子と外生的与件がいわゆる「外的環境」として存在する。この点は Rurality のところでも述べた通りであるが、ところでこれらの外生因子や与件は、単に Rurality にのみ作用するものではなく、Agraricity や Lccality にも作用して、農村社会を全面的に変動させたりあるいは変性させたりする。外生因子としては、(1)国際経済体制、(2)国内経済体制、(3)政治体制、(4)都市や地域社会体系を枠とした、(a)経済成長性—速度と方向、(b)政策目標、(c)人口構成の変化、(d)工業化、(e)職業・階層構成の変化、(f)都市化、(g)価値体系の変動、(h)技術革新の如きものがあり、これらが変動の因子として選定される。そこで、これらの外的な変動因子が、大挙して農村の Agraricity, Rurality, Locality という実体領域の特性に襲いかかった時、上述した特性に一体どのような変質が生ずるかということが、外生因子をめぐる変動の問題として提起される。外生的与件とは、(1)自然的地理的条件、(2)全体社会の demo-ecological な与件——例えば高密度社会としての与件、(3)一般文化与件などがあげられる。これ等の外生的与件は、変動に当っては、「要因」というよりは、むしろ前提的な「条件」として意義をもつものと考へられる。しかし、因子ばかりでなく、与件も含めて、これらのものが変動の場において、社会体系のもつ形質を転換、変性させる複雑な役割を演ずることはいうまでもない。

ところで、本稿においては、前述の如く社会変動において農村の何が変わるかという問題を中心としているので、社会がどのような作用によって変わるかという変動過程の問題については別の機会に明らかにする。ただ要因を問題にするとしたならば、このような農村社会体系の概念図式を前提として、それぞれの部門における機能的要件の選定と、確定された機能的関係を一次的な事実として把え、その機能的結果がどのようになっているかを二次的な事実として把えることが必要になり、さらにこの一次的事実と二次的事実の実質的な関連(正機能・反機能・再機能)を解析する操作を展開しなければなるまい。これに要因分析や回帰分析の手法を加味すれば、恐らく変動要因についての可成り実証的な分析を展開する可能性があると思われる。ただ外生的因子や与件の変動予測というような条件を加味させた場合、この図式が可成り複雑なものになることはいうまでもなく、また起きうるあらゆる可能性をどう予測するかという問題になると、その処理は一層面倒になると思われる。

いずれにせよ、本来農村社会変動論は、外生的因子を含めて、差し当り社会体系としての農村社会の行為の構造的な実体領域における機能的要件と、その連関連鎖の様式にみられる特性の変化の解明を課題としなければならない。その為に上述の分析も、社会体系が、内部的に変数変動を再生産する場合と、再生産しない場合とで、その方法を変えなければならない。前者の場合は定常分析によって分析可能であり、後者の場合は比較分析によって分析すべきである。同時にこの分析を正機能と反機能、再機能の合成運動として取扱う視点が必要であり、さらにこれによって構造的変動を予測するという方法を展開すべきであろう。

さて、このような構造—機能的な分析も、視点を変えれば、それはこれらのものもつ特性の形質的な変化の把握に帰一するものであり、結局その変化が、既存の特性や原型、あるいは、比較の対象のもつ特性との間にどのような異同があるか、また特性の変化・転換それ自体にどのような特色があるかという一連の課題の設定に集約される。ここで設定した、「生産」、「生活」、「文化」の三つの Compartments の各々に対応する Agrarity, Rurality, Localityは、そのための一次的な接近概念であるが、これには後に過程や要因を分析するための戦略的な意図が介在している。この点、往時におけるが如く Rurality を広義に解すると、社会変動をめぐる分析上の戦略的な妙味は、広義に解することによって生ずる包括性と曖昧性によって、可成り失なわれるおそれがあると思われる。

以上、ここでは、農村の社会変動において、一応変わるものは、何であるかという仮説的根拠について明らかにした。次に、これらの諸特性の変質の状態、あるいは変性の結果を如何なる方法によって把えるか、その理論的根拠と具体的な方法について検討しなければならない。

### Ⅲ 特性分析の方法論的枠組

Agrarity, Rurality, Locality の三つの特性が、社会変動によってどのように変質するか、その過程や結果を一挙にして把握出来るような、有効な方法はなかなか見出し難い。抽象的な水準からすれば、①各領域における変数相互間の関数的な関係を重相関分析によって解明し、これによって変動の作用関連とその特色を分析する方法。②それぞれの特性に対して原型的あるいは

典型的なモデルを設定し、具体的な対象のもつ特性との比較による偏差を求め、その変性を明らかにする方法。③他に対象を求め、比較分析の方法によって、それぞれの比較対象の変動条件と変動因子の作用を検討し、これによって各特性の変化を相対的に把握する方法。④ある程度コントロールされた状況にある対象を設定し、観察によってある要素に変動が生じた場合、それが各特性にどう作用するか、その作用を観察する方法。⑤三つの特性をそれぞれ最もよく満足させる何らかの標識を理論的に求め、これらの標識をめぐる変動の諸相を究明して、特性の変質を明らかにする方法。⑥その他、が考えられる。

しかし、これ等の方法にはいずれも欠点と何らかの限界が認められる。そこで、これらの方法をはじめから複合させて、互に欠陥を補正させるような手段を考えたり、あるいはある一つの方法によって限界点まで分析し、その後他の方法によってさらに分析を深めるといようなやり方を考えねばならない。

このほか、これらの分析を行なうためには、社会学がいままで用いてきた様々なる概念、多くの法則、独自の方法を適用する必要のあることはいうまでもないが、時には社会科学以外の科学の知識も大いに活用しなければならない。しかし、このような方法はいまのところ完成しているわけではない。

そこでここでは、差し当り、われわれがいまままでの農村研究において久しく採択してきた方法で、この問題の考察に応用出来ると思われるものを引き合いに出し、これをその方法のもつ限界まで活用して事象を掘り下げる仕事から始めざるを得ない。

その方法とは、Community Solidarity の分析方法を利用するやり方である。この方法の詳細については、すでに昭和 37 年に本誌において述べたところであるからここでは述べない。この方法を利用すれば、丁度上述した方法論のうちの②と③と⑤を部分的に折衷した形のものになると思われるが、これには何が変動に対してどう作用するかという変動因子の作用関連の把握力に欠けるという欠陥がみられる。したがって、この欠点については、他の方法の援用による補完を行なわねばならない。ただ本稿においては、はじめに設定した課題の如く、変動するものが行為の実体領域における特性であると仮定するのであるから、この種の援用をまつまでもなく、この方法で可成りの

成果を期待することが出来る。

しからば、何故に Community Solidarity の分析方法が、社会変動論中の一課題である都市化による農村の社会的特性分析に適用出来るか。次にその理論的根拠とその前提条件及びその限界等について述べることにする。

### 1. その理論的根拠

ここで、分析のための戦略的手段として用いる Community Solidarity という概念は、一つの仮説に基づいて構成された概念である。一般に農村を Community としてみた場合、その最小事実として社会に統一を与えるものは、この連帯性 (Solidarity) あるいは社会連帯であるという有力な学説がある。例えば R.M.MacIver の言葉を借りるならば、「人をして社会の成員たらしめ、また最後の手段として、人々が互に社会を形成せしめるものこそ、この連帯性 (solidarity) にほかならない」<sup>9)</sup>のである。社会連帯はこのようにしてそれぞれの社会の内部において生み出されるその社会にとっての最後の統一の契機をなすものであり、これなくして社会の統合はなり立たないという極めて大事なものである。換言すれば自からに対しても、他に対しても自己の社会的統一や結合・凝集の強さと力を堅持することによって、己の存続を可能ならしめる最小限において必要な事実こそこの社会連帯に外ならず、これこそ社会的統一の象徴としての意義をもつものである。

社会連帯が社会の存立上極めて重要な事実であることについては、この外、多くの社会学者の認めるところになっているが、ここではその一々の学説について詳述しない。<sup>10)</sup>

いずれにせよ、Community の内部で相互作用する成員間に一つの社会的統一性を与え、これに凝集をもたらすものが、この連帯であるとする、都市化や産業化の如き外的因子による作用は、当然、この Community における社会的最小事実としての Solidarity に何らかの影響を及ぼしてゆく筈である。もし都市化や産業化がこのような最小事実は何らかの影響を及ぼさないとしたら、これらの外的因子の作用は、農村の単なる表面的な変化を要求するにすぎず、それは「衝撃」という程のものではなく、その変化は単なる表見的な現象に過ぎないことになる。それが、所与の社会の本質的な統一の契機に重

9) R.M.MacIver, "Society", Chap. II. 1937, P.32.

10) Sorokin. Durkheim 等の連帯性に関する学説、その他がある。

要な影響を与え、その実体を変えてしまうところに、社会変動の本来の意義とその問題性が認められるのである。このような、理由から、連帯性は恐らく、社会変動による変動作用の客体として、最も重要な社会的契機の一つとみて差しかえないであろう。

しからば、ここでわれわれは連帯性をどのようにして把えるのか、この点について明らかにしなければならない。社会連帯については上述の如く様々な学説があるが、ここでは、D.R.Fessler が設定した Community Solidarity の概念を中心にし、これによって把える方法を明らかにしようと思う。そもそも、連帯性は、社会の成員の相互依存、相互作用の所産であるが、この関係的事実は成員の意識構造に反映する必然性をもっており、一つの社会的心像となつてあらわれる可能性がある。この事実から、われわれは逆に所与の社会における一つの社会的心像を取り出すことによって、これをめぐる社会的連帯の性質とその意識構造を解明することが出来る筈である。この心像の実体は恐らく、社会関係を規定する機能をもった形式としての規範及びこれに<sup>11)</sup>内容と統一を与えるところの「文化」であろうと思われる。

このような観点から、Community の内部において連帯性をもたらず、媒介が理論的に求められることになるが、この点について極めて興味に値する命題を展開しているのが E.T.Hiller である。E.T.Hiller によれば、「一次的な農村共同社会 (primary rural community) は、それ自身の社会行動に対して、一連の価値観 (value) と共通の規範 (common norm) とをもった社会集団として機能する」としている。ここでいう「一次的な農村共同社会」とは、実体として<sup>12)</sup>は、結局「部落」＝「集落」に近く、「村」的なものを越えない範囲の地域集団と解され、また「一連の価値観と共通の規範」というのは、要するにその社会の実質的な文化とその反映としての形式的文化を合せた社会的文化複合体 (social cultural complex) にほかならないと思われる。このような文化的複合体は、もとより俄に形成されるものではなく、実質的には成員の累積され学習された思想・趣向及び行動様式、あるいは歴史的に発展、変遷、集積された諸理念 (ideas)、衝動的反応 (emotional response)、行動様式 (way

11) 拙稿「開拓農家の連帯性、一尺度化による調査と分析—

昭和 37 年 3 月、北海道大学「農経論叢」, 第 18 集, 281 頁～436 頁。

12) E.T.Hiller, "The Community as a Social Group" smerican Sociological Review, 1941. PP. 189-190.

of action) 等の所産としてあらわれるものと考えられる。

所与の社会(農村)が、いずれにしてもこのような文化の所産としての共通の価値観や規範あるいは関心をもつものとするれば、これを中核としてその社会に成員の社会的統一と統合が実現される。したがって、成員の側からすれば、彼らは所与の社会における何らかの価値観や規範の体系を基調としながら相互作用を演じ、またこれに基づいて生産・生活・文化の行為の実体領域における何らかの役割の実現と社会的共存の期待を可能ならしめているのである。そのためには、成員相互間における何らかの価値観や規範の相互理解が前提になくしてはならない。すなわち、そこに独自の価値体系に対する強い相互理解があり、それを基調として成員が行動する時、そこに当然、彼らに共通の価値的行動とそれに対する共通の関心が生れ、成員は互に内面的に連帯することになり、また独自の連帯感が形成されることになる。

Fessler はこのような Hiller の文化決定論的な社会理論を根拠として、「所与の社会 (community) における価値観や共通の行動規範に対して、その成員間に強い意見の集中がある時は、その社会における相互理解、相互合意の程度は高くまた連帯性も強いが、逆に意見にばらつきがあるときは、その社会における統一性は弱く社会的機能も劣り、したがって連帯性も低い。」<sup>13)</sup> という命題を掲げ、ここから連帯性を具体的に把握する独自の方式を導き出している。すなわち、彼によれば、ある価値観や規範に対して、単に賛成とか不賛成とかといった意見の様相をみるのではなく、ある価値観や規範を基準として、その社会の成員の行動をみた場合、各人はその社会における当該行動をどう評価するか、その評価の肯定性否定性にどのような集中性と分散性があるか、この点を解明することによって連帯性を把えることが出来るとしたのである。

Fessler はこのような前提に立って、上記の命題を満足させるに足る価値意識の標識化につとめ、様々な試行的な調査や統計的な手法を駆使することによって、連帯性を測定する一連の尺度文章の編成につとめた。その詳細についてはここでは述べないが、この尺度文章は結局、最終的には 40 問からなり、これが 5 問づつ次の 8 つのエリアに配分され、尺度文章に対する成員の反応を、5 つの強度を示めすスコア(リッカーダ簡略法)によって取り、後に

13) Donald R.Fessler, "The Development of a Scale for Measuring Community Solidarity". Rural Sociology, Vol. No.2, 1952. P.145.

これを統計的に管理して連帯性を八角形図表であらわす方法を展開した。その 8 つのエリアとは、

- ① Community Spirits (C.S.)
- ② Interpersonal Relations (I.R.)
- ③ Family Responsibility toward the community (F.R.)
- ④ Schools (S.)
- ⑤ Churches (C.)——日本では Religion (R.)
- ⑥ Economic Behavior (E.B.)
- ⑦ Local Government (L.G.)
- ⑧ Tension Area (T.A.)

である。

この Fessler の連帯性の尺度化の手法は、その後、われわれが日本の国情に合うように最少限度の改訂を施し、さらに「連帯度」を数量的にしめす独自の単位を設定して、より精度の高い測定と分析が出来るように発展させた<sup>14)</sup>。

しからば、このような連帯性の測定方法は、本稿において課題としてとりあげた変動をめぐる問題とどう結びつくものであろうか。

いまもし、連帯性を把えるための共通の価値や規範が、極めて農村的な色彩の強い一つのモデルとして与えられるとすれば、社会変動の激しい農村、ことに都市化や産業化の影響を強く受けた農村の連帯性は、当然低くなって出る筈である。このことは、もとより、連帯性の低いところは、すべて都市化や産業化の影響を受けた農村であるということの意味するものでは決してない。また、連帯性の測定のみによるいわゆるクローズド・システムでこの問題を全部解くことは出来ない。しかし、オープン・システムをとって都市化や産業化の影響があるという証拠が別の形で立証された場合、その農村の連帯性が低くければ、それは都市化や産業化の影響によるか、さもなければ、それ以外の内生的な因子の作用による結果かのいずれかであると判じてほぼ間違はないことになる。いまもし、そこに内生的な因子による動きがないということが、別の分析で立証されれば、それはほぼ都市化や産業化の影響によるものとみて差しつかえないと同時に、その影響の程度もどの位であるかが判る。

---

14) 前掲拙稿参照。

このような理由に加えて、さらにその連帯性が上述した八つのエリアの中で、どのような構造をしめすか、この点を分析することによって、Agrarity, Rurality, Locality のそれぞれの特性の変容を可成り把握することが出来る。また、都市化や産業化の影響を抜きにして、一般的に連帯性をみた場合においても、連帯性が上述したように成員を社会に結びつける社会的統一の最小事実であるとすれば、連帯性が低いということ、すなわち poor であるということは、その社会の凝集性や相互作用が脆弱であり、統合性に欠けることを意味し、やがては崩壊するか、あるいは崩壊しないまでも可成り変質した社会になってゆく可能性があると診断されるわけである。そしてこのこと自体が社会変動につながる重要な finding の一つとなる。

このようにして、連帯性の測定とその分析を通じて、社会変動における農村社会の特性、就中その Agrarity や Rurality また Locality の変性・変質・変換の諸相を把えることが、可成りの程度まで可能となる筈である。

## 2. その限界と条件

以上の理論的な根拠によって、連帯性の分析を通じて、社会変動下における農村の特性変動の解明が可能とされる一応の理由が成立したと思われる。しかしながら、それには一定の限界と条件があることを明記しなければならない。

第一に Solidarity の概念が、農村の社会的統一に内容を与える極めて重要な最小事実であるとしても、連帯性が、上述した Agrarity や Rurality また Locality とどのような理論的な関連をもっているか、その一般的な図式が判明しなくては、連帯性の解明によって「変わるのは農村の社会的特性である」という本稿の冒頭に掲げた作業仮説にこたえることにはならない。

Solidarity が Agrarity, Rurality, Locality という三つの特性とどのような関連があるか、この点についての一般理論は、いまのところ成立しているとはいえない。部分的にその関連を論じたものはあるとしても、体系的な考察はほとんどない。したがって、この関連については改めて検討を要するが、理論がないからといって両者の関連が存在しないということとは出来ない。この問題については、実際に調査を繰り返すことによって一般化出来るのであって、われわれのいままでの観察の結果からすれば、連帯性とこの三つの社会的特性との間には、極めて密接な関係があるということだけは断言出来る。

その一般化や理論化は、今後のわれわれにとっての窮極的な課題の一つであり、そのためにこそ、調査を通じて試行錯誤を繰り返さなくてはなるまい。いずれにしても、いまのところこの点に一つの相対的な限界が認められる。

第二に、ここでは、われわれが改訂した Fessler の Community Solidarity の尺度を用いて調査と実証的な分析を展開することになるが、Solidarity の基本的な概念と、実際に編成された Solidarity の測定尺度との間には、常に相対的な一致性しか認められず、その間に若干のズレがあるということを指摘しておかねばならない。ことに Fessler の尺度文章は、その性質からして、農村的な価値観や規範意識を多分にとり入れており、それが農村性をもった有効な尺度文章であることが、一応証明されているが、それはアメリカのことであって、これを日本の農村に適用した場合、いわゆる共通の価値観、共通の規範として、どこまで妥当性があるか、この点ははじめから疑問である。

また、8つのエリアよりなる 40 の尺度文章が示めすその価値観や規範のもつ客観的な意味内容にも若干の問題があり、それは日本の農村の今日的水準からすれば、可成り近代的な性格の強いものと考えられる。また、尺度文章の中には、果してそれが、当該エリアにおける連帯性を把える標識として何故に妥当するのか、俄かに理解し難いものも若干認められる。もっとも、識別力のない尺度文章は、後に内的一致性による検定を施してみると、いつでもほとんど不合格となることが、われわれと長年に亘る調査の結果判っているので、この点は救いになる。しかし、それはあくまでも統計的な水準においていえることであって、上述したような、社会学的意味合いを基調とすれば、これを絶対視することは出来ない。したがって、測定値はつねに相対的なものとして理解することが要求され、このことが、この方法のもつ第二の限界となり、また条件とされる。

第三に、対象選択の条件をめぐる問題がある。前述の如く、連帯性さえ測定すれば、それで都市化や産業化の影響による 3 つの社会的特性の変化が直ちにわかるというような簡単なものではない。このことを明らかにするには、いまのところ、都市化や産業化の影響を間違いなく受けていると判断される農村を選定し、その連帯性の測定を試み、その結果を他の調査結果や資料とクロスさせながら Agraricity, Rurality, Locality の変性を見極めるという

方法をとらざるを得ない。そこに限界と条件があるが、これと同時に、比較分析を行なう場合の対蹠的あるいは原型的な対象をどこに求めるか、その選ばれた比較の対象のもつ性質との関係において、相対的な評価があらわれることはまぬがれない。さらに、分析の対象となる所与の農村が、いままでのような発展をとげてきたか、その歴史的発展の過程の中からそれぞれの発展の段階における連帯性を必ずしも容易に把握出来ないということ、ことに過去の連帯性を現在の時点において測定出来ないという一連の制約がある。

以上、ここでは、この方法のもつ限界・制約そして前提になる条件について概説したが、これ以外にも様々なる困難がありうる。これらのことは、この手法が如何にも不十分であり、未熟の如く思われるが、ここで狙とするとところは、調査には理論的な方向を、理論には実証的方向をという相対立する要求を満足させながら、農村における社会変動の一つの問題を考察しようとするところにあるのであって、不足のところはむしろ今後の課題として積極的に究明してゆかねばならないと思われる。

以上によって、都市化や産業化にともなう農村の社会変動において、「変わるものは Agrarity, Rurality, Locality である」という作業仮説の設定とその根拠について明らかにした。またこの特性の変質を把える戦略的な方法として、まず Community Solidarity に着目し、これが根拠とこれを具体的に把える方式がもつ理論的背景並びにその方法のもつ限界及び条件について必要な考察を試みた。

次の問題は、これら一連の仮説を、上記の方法を用いて実証することである。その素材としてここでは前述の如く広島町農村部をひき合いに出すことになるが、その詳細については、前述の如く、紙幅の都合で次号に掲載せざるを得ない。ただここで一つだけ述べておかねばならぬことは、この調査と分析を通じて、都市化・産業化の影響をはげしく受けた集落としからざる集落との間においては、連帯性の各エリアにおいて、極めて大きな有意差のあることが認められ、前者は連帯性が著るしく低く、不安定であること、また等しく都市化や産業化の影響を受けた集落でも、このような外生的因子の作用にうまく適応し、その Agrarity や Rurality の形質をたくみに変換しながら将来に向っているものもあるという事実が、連帯性を通じて解明することが

## 都市化ともなう Rurality の変性 (1)

出来たということである。その詳細については次号で明らかにしたい。

# DEGENERATION OF "RURALITY" UNDER THE URBANIZATION (I)

—Its Theories and Methodological Frame  
Works—

By  
Hiroo Kaneta

This paper is divided into two parts. In the first part, the working hypothesis and the methodological frame works to study on the degenerations of "Rurality" inconformity with urbanization are discussed in my base and by other sociologists' theories. In the second part, the hypothesis and degenerative phenomena of rurality are expected to testify by the fact findings of rural Kita-Hiroshima near Sapporo City in Hokkaido. But these verify and analytical problems about the degenerations of rural Hiroshima will be reported on the next volume of this review.

In this study, it is one of the central problems about rural social change that "What is changed in rural society" by urbanization or industrialization. To this question, we propose to make a hypothesis that the changing objects by or under the social changes in rural society is to be "Rurality". Therefore, to have changing qualities of rurality under the urbanization is the aim of this study. But, in order to analysis to the changing rurality, we have to orientate the conception of rurality in the rural social systems and to develop the sociological methods to analysis on social qualities.

We have now the Three Compartments Theory in which above conception of rurality is orientated. According to this theory, the rurality is the characteristics of the compartment of "Life" in the rural social systems. There are other compartments, the "Production" and "Culture". The characteristics of production, which is to be a area of the social system, is called the "Agrarity or Agriculturalism", and the characteristics of Culture is the "Locality, Localism". The Urbanization change not only the rurality or ruralism but also the Agrarity and Locality.

In that case, what kind of methods should be used to find the changing

qualities of Rurality, Agrarity and Locality in conformity with urbanization or industrialization in rural society. About the rurality we are able to use the P. Sorokin's method, but F. K. Willits deny almostly these orthodox method about rurality. Then, we used the Community Solidarity Method which was developed by D. R. Fessler and our revisions. The community solidarity is conected with rurality, agrarity and locality by its areas which are composed by 8 parts. We testfied *theoretically those relations between the solidarity with rurality and locality*. But it is necessary to develop a new over-all method to have changing qualities of the rural society.

By this considerations, we are able to expect the degenerations, regressions of rurality, but agrarity is not lost by urbanization. Perhaps the agrarity will change its pattern of producibility, but not lose itself. And by these changes of elements, the new patterns of locality or localism will be developed in the near future.